

宛名<sup>あてな</sup>の処<sup>ところ</sup>破損<sup>はそん</sup>して、雅兄<sup>がけい</sup>、皮下<sup>ひか</sup>の字<sup>じ</sup>だけしか見えぬ<sup>み</sup>が、前文<sup>ぜんぶん</sup>と同家蔵<sup>どうけぞう</sup>で、必ず<sup>かなら</sup>有隣苑<sup>ゆうりんあて</sup>であるう。

演舌<sup>えんぜつ</sup>

益<sup>ますます</sup>御風流<sup>ごふうりゅう</sup>嘸秀逸<sup>さぞしゅういつ</sup>沢山の義<sup>ぎ</sup>と奉<sup>はい</sup>俳察<sup>さいさつ</sup>上<sup>じやう</sup>候<sup>こう</sup>。{あいさつ文。「俳察上」はどう読めばよいだろうか。}

扱<sup>さて</sup>此程<sup>このほど</sup>は毎度<sup>まいど</sup>頂戴<sup>ちやうだい</sup>難有<sup>ないがたき</sup>仕合<sup>しあわせ</sup>、高謝<sup>こうしゃ</sup>短毫<sup>たんごう</sup>に不能<sup>あたわず</sup>御用捨<sup>ごようしや</sup>可被成<sup>かひじやう</sup>下<sup>くださる</sup>候<sup>こう</sup>。【さてこのほどは、毎度頂戴いたしまして、ありがとうございます。お礼の言葉を上手に書くことができませんが、ご容赦ください。】{なにか物をもたらったのか、ご馳走になったのか。「短毫」は、拙い筆跡のこと。}

此間<sup>このあいだ</sup>中<sup>じゆう</sup>御配意<sup>ごはい</sup>被仰下<sup>おおせくだされ</sup>候<sup>こう</sup>拙更衣<sup>せつこうい</sup>の儀<sup>ぎ</sup>、薄々<sup>うすうす</sup>山好<sup>さんこう</sup>へも申聞<sup>もうしきき</sup>候<sup>こう</sup>処<sup>ところ</sup>、同様<sup>どうよう</sup>難有<sup>ないがたき</sup>奉存<sup>ほうぞん</sup>旨<sup>むね</sup>、

併厚<sup>あわせてあつき</sup>(カ)思食<sup>おぼしめし</sup>、【このあいだは、ご配慮をさせていただいた私の衣更えの件、うすうす山好へも聞いてみましたところ、同様にありがたく思っておりますとのこと、あわせて厚い思し召し、】{服を井月に直接恵んでやるようなことをせず、山好を通して、それとなく贈ってくれたのだから。井月も、「この服はもしかしたら有隣が贈ってくれたのではないのか?」と、うすうす気が付いて、山好に尋ねてみた、という内容らしい。}

当連<sup>どうれん</sup>至極<sup>しごく</sup>愧入<sup>けいじゆう</sup>候<sup>こう</sup>得共<sup>えども</sup>、四点<sup>よんでん</sup>句勝<sup>くがち</sup>にて六印<sup>ろくいん</sup>以上<sup>いじゆう</sup>の秀才<sup>しゅうさい</sup>微<sup>すくな</sup>く、馬入<sup>ばにゆう</sup>庵<sup>あん</sup>(馬の庵・山好のことか)

ひとり<sup>ひとり</sup>御両公<sup>ごりやうこう</sup>に随従<sup>ずいじゆう</sup>可<sup>つかまつる</sup>仕心<sup>せきこころ</sup>入<sup>いり</sup>には御座<sup>ござ</sup>候<sup>こう</sup>へ共<sup>えども</sup>、摺物<sup>すりもの</sup>一会<sup>いちえ</sup>等々<sup>とうとう</sup>弊劳<sup>へいろう</sup>(カ)に拘<sup>こ</sup>り居<sup>おり</sup>【当連は、とても恥ずかしいのですが四点句が多く、六点以上の秀才は少なく、山好ひとりが御両人のレベルについていけるといった様子ですが、刷り物を作ることなどに労を費やしてこだわっており、】{「連」は俳諧仲間の集まりのこと。「当連」は、山好が所属している殿島連のことだろう。

「四点」や「六点」は句会での成績。「御両公」は五声・有隣のことか。「一会」は一つの集まり

のことだから、仲間でお金を出し合っって俳句集などを作ることだろう。}

鳥<sup>ちよつ</sup>渡<sup>いしよく</sup>衣<sup>つけ</sup>食<sup>は</sup>の<sup>た</sup>附<sup>よき</sup>は<sup>ほど</sup>た<sup>まいらず</sup>よ<sup>じ</sup>き<sup>た</sup>程<sup>と</sup>に<sup>ところ</sup>不<sup>こんざつ</sup>参<sup>だ</sup>、<sup>い</sup>自<sup>さん</sup>他<sup>かわ</sup>の<sup>か</sup>所<sup>き</sup>に<sup>にく</sup>混<sup>こ</sup>雑<sup>の</sup>いた<sup>こ</sup>し、<sup>の</sup>第<sup>こ</sup>三<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>変<sup>こ</sup>り<sup>こ</sup>夏<sup>こ</sup>季<sup>こ</sup>二<sup>こ</sup>句<sup>こ</sup>にて、<sup>こ</sup>此<sup>こ</sup>処

雑<sup>ざつ</sup>の<sup>く</sup>句<sup>ずいぶんめんどう</sup>にて<sup>おも</sup>随<sup>う</sup>分<sup>よう</sup>面<sup>まいらず</sup>倒<sup>ず</sup>な<sup>まいらず</sup>れば<sup>まいらず</sup>思<sup>まいらず</sup>ふ<sup>まいらず</sup>様<sup>まいらず</sup>に<sup>まいらず</sup>不<sup>まいらず</sup>参<sup>まいらず</sup>、

【ちよつと衣食に関する付け方はそれほど良くなく、自分のことも人のこともいろいろ混雑しており、第三句で季節が変わり、夏の句は二句までで、このところ雑の句が続いていて、ずいぶん面倒なので思うようにならず、】{「附」は連句の付け方のこと。ここでは殿島での自分の暮らしぶりを、連句にたとえて言っているのだろう。「はたよき」は語義不明だが、衣食が思うようにならない、と言っているのか。「混雑」は、いざこざのこと。書簡 九・十 に出ている拝借金のトラブルのことか。「第三」「夏季二句」「雑の句」は、いずれも連句のルールに関する用語。季節が変わって暑い夏になり、このところ混雑(=いざこざ)が続いていて面倒だ、という文脈か。}

何<sup>い</sup>れ<sup>せん</sup>先<sup>せい</sup>生<sup>が</sup>方<sup>た</sup>に<sup>お</sup>御<sup>ね</sup>願<sup>が</sup>申<sup>い</sup>よ<sup>り</sup>外<sup>ほ</sup>無<sup>か</sup>之<sup>れ</sup>と<sup>ぞん</sup>奉<sup>じ</sup>存<sup>た</sup>候<sup>まつり</sup>。【い

【いずれ先生方をお願いするほかないと思っています。】{「先生方」は、五声・有隣のことか。殿島に居づらくなったので、下牧のあなたのところへ行ってお世話になりたい、ということなのだろう。}

洒<sup>しや</sup>落<sup>れ</sup>は<sup>さ</sup>扱<sup>て</sup>置<sup>お</sup>き、<sup>お</sup>ひ<sup>が</sup>た<sup>と</sup>す<sup>こ</sup>ら<sup>ろ</sup>拝<sup>つ</sup>む<sup>れ</sup>の<sup>よ</sup>処<sup>し</sup>は、<sup>つ</sup>れ<sup>ぐ</sup>草<sup>さ</sup>に<sup>よ</sup>吉<sup>だ</sup>田<sup>けん</sup>の<sup>か</sup>兼<sup>か</sup>好<sup>か</sup>が<sup>ご</sup>書<sup>と</sup>れ<sup>つ</sup>し<sup>か</sup>如<sup>か</sup>く、<sup>か</sup>善<sup>み</sup>友<sup>つ</sup>三<sup>つ</sup>つ<sup>つ</sup>あり<sup>つ</sup>と<sup>か</sup>は<sup>か</sup>彼

の<sup>かん</sup>管<sup>ぼう</sup>鮑<sup>ま</sup>が<sup>ま</sup>交<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>な<sup>ま</sup>ど<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>賞<sup>ま</sup>美<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>余<sup>ま</sup>りと<sup>ま</sup>存<sup>ま</sup>候<sup>ま</sup>。【冗

【冗談はさておき、ひたすら拝むところは「徒然草」に吉田兼好が書いたように、「よき友、三つあり」というのは漢籍の「管鮑之交」などをほめたたえるあまりのことと思います。】{文脈がわかりにくい、「やはりありがたいのは、よき友です」と言った内容か。「徒然草」に、「よき友、三つあり。一つには物くるる友。二つには医師。三つには知恵ある友」という一節がある。}

折<sup>お</sup>り<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ぎ<sup>き</sup>す<sup>き</sup>を<sup>き</sup>聞<sup>き</sup>て

我<sup>わ</sup>友<sup>が</sup>は<sup>か</sup>川<sup>わ</sup>の<sup>ほ</sup>あ<sup>と</sup>な<sup>と</sup>だ<sup>と</sup>ぞ<sup>と</sup>時<sup>ほ</sup>鳥<sup>と</sup>

右<sup>み</sup>御<sup>ぎ</sup>評<sup>びやう</sup>。{俳句を批評してほしい、と言っている。「川のあなた」は、殿島から見て天竜川の向

こう岸、有隣の住んでいる下牧のことを言っているのだろう。}

**かきぬきおぼえ うち**  
【書拔 覧の内】【覚え書きの中から。】{ここから、連句・漢籍・和歌・仮名草子・俳句・俳論、と多岐にわたって書かれている。井月の教養の幅広さがうかがえて興味深い。なお、ここから後のカギカッコは、片側だけになっている。おそらく井月全集の編集者（高津才次郎氏）が、段落の変わり目の意味でカギカッコを付けたのであろう。}

**みこし**  
「神輿かくにも一てうらきる

**かがみやま** **じょう** **へや** **の** **いっちょう** **あり**  
鏡山おはつが条に部屋かたものゝ一てうらと有。

**ごかんこう**  
御勘考

【「神輿かくにも一ちょうら着る」という短句（七七）は、芝居の『鏡山お初』の中の「部屋方者のいっちょうら」から連想して付けたのでしょう。よくお考え下さい。】{連句の付け筋（何を連想して句を付けたのか）を解説しているのだろう。「部屋方者」は、大奥女中に仕える小間使いのこと。}

**えつおうこうせんゆうきょう** **もの** **この** **くにじゅう** **ひとし** **かる** **そ** **れいおうこし** **おんな** **この**  
「越王勾踐勇強の者を好まれければ、国中の人死を軽んじ、楚の霊王腰のほそき女を好まれ

ければ、国中の婦瘦ん事を欲して餓るもの多かりしと也。斉の桓公好んで紫の衣服を着られ

ければ、国中紫色のみ流行して他の色を鬻がざりしと也。【越の王・勾踐が勇ましい者を好んだところ、国中の者が死を軽んじるようになりました。楚の霊王が腰の細い女を好んだところ、国中の女たちは痩せたいと思い、飢えるものが多く出たといひます。斉の桓公が好んで紫色の服を着たところ、国中で紫色のみが流行して、他の色の服が売られなくなったといひます。】{これらは古代中国・春秋時代の王のこと。漢籍からの引用であらう。}

**ほうらい** **きか** **い** **せ** **たよ** **おきな**  
「蓬萊に聞ばや伊勢のはつ便り 翁

**じちんかしょう** **うた**  
慈鎮和尚の歌に

**この** **ひと** **ず** **うれ** **はなこうじ**  
此たびはいせにしる人おとづれてたより嬉しき花柑子かな

これこか  
此古歌どりなり。

【「蓬莱に聞かばや伊勢のはつ便り」という芭蕉の句ですが、慈鎮和尚の歌に「このたびは伊勢に知る人訪れて便り嬉しき花柑子かな」というのがあります。つまりこれは「古歌取り（本歌取り）」なのです。】{慈鎮和尚は、平安～鎌倉時代の僧侶・歌人。「越天楽今様」の作者として有名。}

いげがみたろうざえもん いみな たるつぐ うんぬん だいじょうご のみなかま じ おうぼうそこふかはい う やから さかづき  
「池上太郎左衛門は諱を樽次と云々。大上戸なり。呑仲間に地黄坊底深杯いふ輩あり。盃

まきえ へび はち かに えがけ はち さかな うい  
の蒔絵に蛇、蜂、蟹などを画り。へびはのむ、蜂はさす、かには肴をはさむといふ意なる

よし。】【池上太郎左衛門は、忌み名を樽次といい、大酒のみでした。飲み仲間に地黄坊底深という者がいました。盃には、蒔絵で蛇・蜂・蟹などが描かれていました。蛇はのむ、蜂はさす、蟹は肴をはさむ、という意味です。】{江戸時代に書かれた「大師河原の酒合戦」という仮名草子の解説と思われる。樽次が率いる江戸方と、底深が率いる川崎方が飲み比べをした、という物語で、結果は川崎方の勝利。樽次が大事にしていた盃を、底深に取られてしまったという。なお、正しくは「池上＝底深、地黄坊＝樽次」で、井月の記憶違いであろう。「のむ」は酒を飲むこと、「さす」は酒を注ぐこと、「はさむ」は箸でおつまみを取ること。つまり、いかにも大酒飲みにふさわしいデザインの盃だった。}

こがらし せなか る うし こえ  
「木枯や脊中ふかるゝ牛の声

うし おいかぜ じゅんぷう る  
牛は追風をよるこび順風をおそるゝとぞ。】【「凧や背中吹かるる牛の声」という俳句について。

牛は追い風を喜び、順風を恐れると言われています。】{芭蕉の「俳諧七部集」の中の、続猿蓑に出てくる風斤（ふうきん）の句。しかし「追い風」と「順風」は同じではなかろうか。このあたり、井月の解説はずいぶんいい加減な感じがする。酔って書いたか。}

はいかいししょうふうきしょう もうす あんぎやべいかい さずくなり ごらん いれそうろう お おきおうつ しかるべき てござ  
俳諧正風起証と申は行脚米海が授也。御覧に入候。御とめ置御写し可然に而御座る。】【「俳

諧正風起証」というのは、米海という行脚俳人が授けてくれました。ご覧に入れますので、お手元に留め置き、書き写すのがよいでしょう。】

いろいろもうしあげそうらえ 　　まず　お　ふで　まい　そうろう　　たし  
色々申上候へども、先はをしき筆とめ参らせ候。めで度、かしこ【いろいろ申し上げまし

たが、まずは惜しい筆を止めさせていただきます。】{これ以上書くと、筆がすり減ってしまうのでやめておきます、といった意味か。}

きょう　せいげつ　はい  
けふ　井月拝

が　けい　　ひ　か  
□□雅兄　□皮下

かみ　みのちぐん　さかえむら　しもなが　い　　く　ぼ　た　きゅう　じろう　しかた　　めい　じ　じゅう　に　ねん　　せい　げつ　　か　　そ　　ちち　せい　さい　　おく  
上水内郡栄村下長井の久保田久治郎氏方に明治十二年に井月が書いて其の父盛斎に贈った

はい　かい　しょう　ふう　き　しょう　　ほ　ぞん　　い　　げん　じゅう　あん　の　き　　なん　くん　なん　　かい　どく　　よし　わら　ゆう　じょ　　うた  
「俳諧正風起証」が保存されて居る。幻住庵記や、難訓難□の解説や、吉原遊女の歌や、

ぼ　しょう　しよ　じ　ず　だ　ぼ　こ　　ず　かい　　こと　　はい　かい　しつ　びつ　　こ　ころ　え　　さい　ご　　ぼ　しょう　はん　　はい　かい　しょう  
芭蕉所持頭陀笱の図解や、この樽次の事や、俳諧執筆の心得や最後に芭蕉判として俳諧正

ふう　き　しょう　　ちやう　ぶん　　した　た  
風起証の長文が認めてある。

べい　かい　　な　　いえ　　しゅう　　あん　ぎや　　ぶ　　み　　い　　な　　さと　むら　すぎ　しま　　きゅう　らん　どう　　せい　げつ　　い　　ぼ　く　ちゅう　　い　　よ　　あん  
米海の名は「家づと集」行脚の部に見え、伊那里村杉島、久蘭堂の井月遺墨中に「伊予の行

ぎや　べい　かい　い　も　もち　　し　　ゆい　しよ　　これ　を　で　ん　じゅ　　か　　ぼ　しょう　　ふる　い　け　　む　く　げ　ほう　らい　　さん　く　　かい　しやく  
脚米海桃地氏、由緒ありて伝授之」と書いて、芭蕉の古池、木槿蓬萊の三句についての解釈

しる　　は　し　　び　しゅう　　いち　ぼ　　い　し　だ　げん　すけ　ごう　ゆ　た　か　や　　そ　よう　　も　　じ　　そ　よう　　く  
が記してあり、その端に「尾州一日市場、石田源助号豊屋素陽」の文字がある。素陽の句は

いえ　　しゅう　　び　しゅう　　ぶ　　で　　い　　せい　げつ　　かん　さい　ほう　めん　　こう　しょう　　か　た　　き　こう　　す　く　な  
家づと集、尾州の部にやはり出て居る。井月と関西方面との交渉を語る稀観の・・・少く

げん　ざい　　お　　しり　ょう  
とも現在に於いて・・・資料であろう。

{上水内郡栄村は、現在の長野市中条地区にあった村。下水内郡栄村（現存）とは別の場所。}